「ハレとケ」通信

第16号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築（16）

「―想いをかたちに―

㈱若松屋化粧品部新築工事（1）」

「ハレとケ」のある　暮らしかた

【重陽の節句／菊香る長寿の祈願】

中津万象園「花の歳時記」

【秋陽に輝くモッコクの果実】

平成24年9月発行

中津万象園で花寄せの茶会をした際に用意した花々。
秋明菊、ダンギク…と「菊」と名の付く花が多いが、
実はキクの仲間ではない。

物語のある建築（16）

設計／アールデザイン&㈱創芸　施工／富士建設株式会社

「―想いをかたちに―
㈱若松屋化粧品部新築工事（1）」

一八六八年、明治元年創業の若松屋。

丸亀のお城にほど近い場所に位置するここは、スポーツ用品、化粧品を扱うお店として地元の人々に愛されてきました。

そして、今年、いよいよ化粧品部（気粧品部）が北側に新店舗を建築。来る十二月にオープンを迎えます。

今まさに建築工事が進行中のこの店は、店主である三谷美和さんの想いがいっぱいに詰まった場所。

設計デザインを担当したのは、アールデザイン 代表の村上良枝さん、㈱創芸 専務取締役の久保勇人さんです。

施主の想いを聞き、それを形にし、作り上げ、共に夢を実現する。

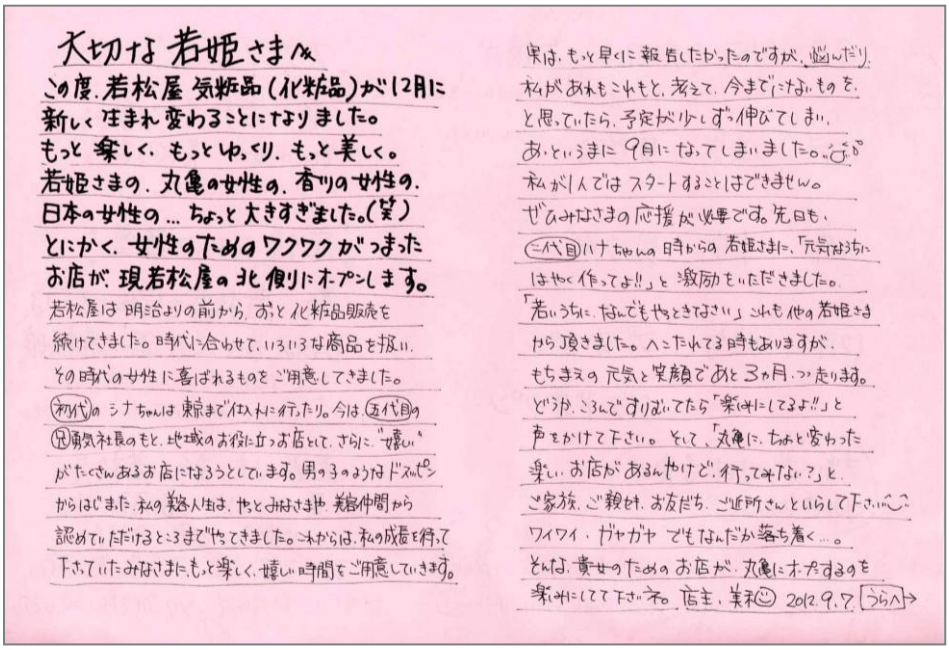
―そんな建設業ならではの幸せを満喫している最中の三人に、今回はお話をうかがいました。

私の手元には、毎月一度、「若姫さまへ…」という書き出しで始まる“お手紙”が届く。今回の【物語のある建築】の主人公、㈱若松屋 化粧品部の責任者である三谷美和さんによる、手書きのダイレクトメールである。

美和さんは、自分のことを“物売り”と表現する。

美和さん―「私は化粧品部の責任者なわけだけど、以前は、“物を売る”ということに迷うこともあった。ボランティアの方がええのかな？、『買って』っていうことはダメなのかな？って。でも、“物を売ってお金をもらう”ことは、物の対価をもらってるだけじゃなくて、自分に対する評価としてお金をもらっているんだ。つまり、わたしがここで提供しているのは、化粧品だけじゃない。楽しさや元気、癒やしもそうなんです。それからは堂々と自分は物売りだって言えるようになりました。」。

その言葉の背後には、美和さんのお客さまへの想い、地域への想い、そして、自分で商売をしていくという覚悟が、熱く熱く込められていることが分



大切な若姫さまへ

この度、若松屋 気粧品（化粧品）が12月に新しく生まれ変わることになりました。
もっと楽しく、もっとゆったり、もっと美しく。
若姫さまの、丸亀の女性の、香川の女性の、日本の女性の…ちょっと大きすぎました。（笑）
とにかく、女性のためのワクワクがつまったお店が、現若松屋の北側にオープンします。

若松屋は明治より前から、おと化粧品販売を続けてきました。時代に合わせて、いろいろな商品を扱い、その時代の女性に喜ばれるものをご用意してきました。

初代のシナちゃんは東京まで仕入れに行ったり。今は五代目の兄勇気社長のもと、地域のお役に立つお店として、さらに“嬉しい”がたくさんあるお店になろうとしています。男の子のようなドスッピンからはじまった、私の美容人生は、やっとみなさまや美容仲間から認めていただけるところまでやってきました。これからは、私の成長を待って下さっていたみなさまにもっと楽しく、嬉しい時間をご用意していきます。

実は、もっと早くに報告したかったのですが、悩んだり、私があれもこれもと、考えて、今までにないものを、と思っていたら、予定が少しずつ伸びてしまい、あっというまに9月になってしまいました。

私が1人ではスタートすることはできません。ぜひみなさまの応援が必要です。先日も、三代目ハナちゃんの時からの若姫さまに、「元気なうちはやく作ってよ!!」と激励をいただきました。

「若いうちに、なんでもやっときなさい」これも他の若姫さまから頂きました。へこたれてる時もありますが、もちろんその元気と笑顔であと3ヶ月、つっ走ります。

どうか、ごろんですりばいてたら「楽しみにしてるよ!!」と声をかけて下さい。そして、「丸亀に、ちょっと変わった楽しいお店があるんやけど、行ってみない？」と、ご家族、ご親戚、お友だち、ご近所さんといらして下さいね。

ワイワイ・ガヤガヤ でもなんだか落ち着く…。
そんな、貴女のためのお店が、丸亀にオープンするのを楽しみにしてて下さいね。

店主、美和☺ 2012.9.7 うらへ→

↑若松屋さんからのダイレクトメール。これは、新店舗建築のご案内

かる。

そんな美和さんが、自分の想いを実現するための新しい店舗を作りたいと考え、現在の店舗のすぐ近くの土地を購入したのは、平成二十二年の十一月のこと。

美和さん―「それよりもずっと前から、その土地を買おうかどうしようか…という話は若松屋で出ていたんですが、最初は駐車場用地として考えていたし、その時は話がまとまらず。

そうしているうちに、新しいお店を作りたい！という想いが強くなってきて、また話をはじめたのだけど、でも、途中で自信がなくなったりもして…。『やっぱり駐車場にしようか』と言い始めるとなぜか交渉が停滞して進まなくなり、『やっぱり店にしたい』と言い始めると、スムーズに話が進みはじめるんです（笑）。だから、『この土地が、お店にしてほしがってるのかなあ』って思って。」。この“土地の意思”という表現は、不動産流通を多く手がける人も、実はよく口にする。どんどん店のシャッターが閉じられていく丸亀の街が、この場所を人の集まる場所として活性化させることを望んでいたのかもしれない。

↑化粧品（気粧品）部店主　三谷美和さん。
お兄様の三谷勇気さんが若松屋の代表者。スポーツ用品部も担当している。

「ここで新しいお店を作ろう！」。

美和さんのその想いを形にするために、アールデザイン 代表の村上良枝さん、㈱創芸 専務取締役の久保勇人さんがチームを組み、平成二十三年五月より計画を開始。美和さんの構想が固まったところで、設計デザインを行い、見積、契約。先般九月十五日、弊社の施工により上棟式を迎えた。

私は、「新しい建物（空間）が必要とされる時」というのは、「誰かが、誰かのために、何かを叶えようとしているとき」だと考えている。その叶えようと思う夢は、自分のための場合もあれば、家族のため、社会のため、企業のためであったりもするだろう。何かとは、家族の幸せや、新規事業の展開、社会への貢献かもしれない。でも、「なにかやりたいことがあるから、その器（建物）がほしい」という大前提は変わらない。

↑上段/アールデザイン　村上さん
下段/創芸　久保さん

では、美和さんにとって、その「誰かのため」「何か」とは、何だろう？

「誰かのため」とは、美和さんの場合、『お客さまのため』である。美和さん風に言えば、『若姫さまのため』となる。若姫さまとは、『若松屋のお姫様』の略。「若かろうと年取っていようと、若松屋のお姫様である限り、みーんな若姫さま！深みが出るのはいいのだけど、枯れたらダメ！」というのが、この呼び名に込められた美和さんの思いである。そしてまた、美和さんは折に触れて、「みんながね、『私らがここ（若松屋）で買い物したから、美和ちゃんの新しいお店ができたんやね。じゃあ、これは私らのお店やね！』って言って

くれるような、そんなお店の作り方がしたいです。」と話す。だから、上棟式、現場見学など、さまざまな過程をお客さまにも共有してほしいと、節目ごとのご案内も行っている。その言葉の通り、この新しい店舗は、お客さまのためのなのだ。

では、美和さんのお客さまとは、誰なのだろう？

当初からあったイメージは、『がんばっている女性』だったという。

美和さん―「働いている女性、家族のために頑張っている女性は、休む場所がない気がする。リセットできる場所、っていうのかな。憩いや優しさ、癒やし、休息の場として思い浮かべられるお店…。家に帰れば、そういう女性は、どうしても家族のために動いてしまうし、ごろごろダラダラなんてできない。じゃあ、がんばってる女性は、どこで休憩したらいいのかな？って思ったとき、そんなお店があったらいいなあ、と。『誰かしてくれんかなあ』って言ってたら、あっという間に年をとってしまう。『じゃあ、私がやりますか』となりました。」。

そして、その次に脳裏に浮かんだお客さまへの想いは、「来てほしいと思うひとが、みんな来られる店」だった。

美和さん―「父も身体が弱かったし、私にとって『病気』は、ものすごく身近なはずでした。友人が病気をして、リハビリ中にお店に来てくれた時、車椅子が入らず、彼女とは駐車場の車の中で話をし、店に入らずに帰りました。その時、『大切な人が店へ入ることもできないなんて。』と悔しい思いをしました。『若くてシュッとした綺麗な人だけが行くような店が、本当に私のもとめているものだろうか？』と。化粧品屋が提供するのは“キレイになれる”だけじゃダメで、そんなのは化粧品屋である以上当たり前のこと。プラスαで、元気になるとか楽しくなるとか、そういうものがなきゃ。だから、私の楽しいと思えることや人を、紹介したり共有できる場にしようと思いました。食べる、化粧品をつける、しゃべる…。これ全部を提供するのが、私の店だと。」

この「誰がお客様なん？」が定まったことで、美和さんのお店のコンセプトが見えてきた。「人が集まる、コミュニティの場」である。

では、このコンセプトに基づき、するるとプランは固まっていったのだろうか？

当初からプランにかかわった村上さんに聞くと、「今、美和さんが話したことは、一番最初に言ってたこととまったく同じ。でも、途中では、やっぱりかなり揺れたし、迷ってたと思う。だからこそ、今話を聞いて、まったく変わってないことにすごく安心した。」とのこと。

村上さん―「まず第一に、美和さんには、たくさんやりたいことがあった。化粧品店、カフェ、エステ、服・靴の販売、ギャラリー、イベント、ライブ、茶会…、他にもたくさん。そしてそれらを全部きちんとできるだけのものを、建物に装備したい、って思ってた。そうすると、ボリュームが多すぎてスペースも予算も到底足りない。ぜーんぶやりたいのは分かるけど、それぞれを独立させて考えていたのでは難しいから“やりたいこと”同士をリンクさせて、二階の広いスペースを自由に使う…と考えることで、プランが見えてきた。でも、その後、みんなの色んな話やアドバイスを聞く内に、美和さんの気持ちも揺れてきて…。うん、途中はけっこう揺れたかも。」。

一番想いが揺れていたのは、昨年の年末から今年年始にかけてのようだが、美和さんは、その頃のことをこう分析する。

美和さん―「あのときは、お客さまの像がぶれてたのかな。誰のための居心地の良い場所なのか？ってことが。『物を売るのが仕事なんやから、もっ

↑打ち合せ後の一コマ。美和さんを見守る設計者二人の暖かい視線が印象的。

と物販に重きをおいた方がいいかな?』とか、『子育て中のお母さんの雇用をできる場にして、楽しく働ける場所を提供したい』とか。もっとスポーツ系寄りになってダイエット施設を兼ねようとか。たくさんやりたいことがあったのは、『してみたいこと、やってみたいこと、楽しいことが、わざわざ大阪や東京、高松に行かなくても、若松屋に来たらできるよー』って言いたかったから。でも、やりたいことが多すぎましたね(笑)。」

美和さん、村上さんに、久保さんを交え、話していく中で固まってきたのは、『新しい店舗は、【美と笑顔のコミュニティの拠点】であり、そして、【美和のセンスを売る】場所である』ということ。田舎でも都会でもない【丸亀】という街で、人が集まれて、自由に楽しく使える場所ってどんなところだろう?店の延長線上にあるコミュニティスペースとはどんなもの?…三人での話し合いが続き、そのたびにプランが進化していく。

【美和を売る】場所。なかなか言える言葉ではないかもしれない。店の名前も、【miwa】である。いったい、美和さんってどんなひとなんだろう?

こちら(左記)の写真を見ていただきたい。すべて美和さんの写真だが、まるっきり男の子のようで、今の華やかな姿からは想像もつかない。「昔はずっと男やったんよ、私。」と言うけれど、その通りの容姿で、女子大出身の美和さん、学生時代は女の子に“キャーキャー言われていた”とか。いったいいつ今の美和さんに変身したのか?と不思議なくらいの姿である。…というより、なぜ、『男の子・美和』が化粧品店の店主となったのか?

美和さん―「そもそも化粧品店なんかするつもりはなかったもの。スポーツ部門の方がずっと好きだったし、化粧品屋なんてまったく興味なかったし。二十八歳くらいの時、今まで化粧品部を担当していた叔母が亡くなって、『代々続いた化粧品店やから、兄弟で女なんあんただけやから、やり。』と。最初はいやいや店頭に立っていました。今考えれば、よくあの当時のお客さまはうちから買って下さったと思います。化粧品嫌いの化粧品店主なんてありえないですから(笑)。でも、半ば強制的に、資生堂さんの研修とか色んな勉強会に、どんどん行くようになって、変わってきました。そこへ行くと、美容部員さんたちの整容が、本当にキレイ!そしてやさしくて、心もステキ。たとえて言えば、すっごく綺麗で優雅な鶴か何かが沢山いる中に、一人だけ小っちゃいヘンなアヒルが混じっているみたいな感じで…。『うわあ、どーしよー?!』って、慌てました。私は今まで化粧品に偏見を持っていた。見た目だけキレイなんだと。でもそれはまったく違っていて、お客さまも、美容部員も、心までキレイになれるのが化粧品なのだと実感しました。」

そして、思い切ったお店の改革に出る。

美和さん―「私にとって、商品は『うちの子』。このことから、お店を大きくすることを強く意識するようになりました。私の技術やおしゃべり、うちの子の品質を認めて楽しんでくれる人のためのお店にして、それにふさわしい対価を【評価】としていただく。それをするには、ちょっと今のお店では狭くって。『混んでるから、またにするわ』と大切な若姫さまが帰ってしまう。かなしかったです。」

↑すべて美和さん。
一番下の写真が、美容関係者として一人前と認められた頃。

↑美和さんが「店長」と呼んでいる、小さなサルのぬいぐるみ。facebookやブログに「顔」として登場している。

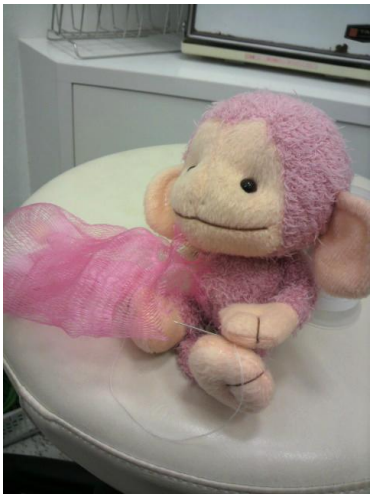
↑現在の美和さん。華やかな女性である。

若姫さまのために、【美と笑顔のコミュニティの拠点】として、【美和のセンスを売る】場所＝新しい店舗【ｍｉｗａ】を作る。

もう一人の設計者・久保さんが「ライフスタイルを売る店だと考えているから、化粧品店とは思ってない。」と話すように、ちょっと従来のお店とは違っている。但し、お店である以上、押えなければいけないポイントは当然ある。

そのコントロール役は村上さんが担ったわけだが、その時のことをこう振り返る。

村上さん―「最低限必要なのは、『モノ、人が綺麗に見えること』。コンセプトとして『人が集まりやすい、コミュニティができること』が一番大事ではあるけれど、お店である以上、きちんと“商売”はできなきゃいけない。これまでのお店よりずいぶん大きくなる分、動線を間違えれば、うまく回らなくなる。カフェやいろんな部署ができるのに“最悪の場合は一人でも回せる店”でなければならない。商売をしているお店である以上、きちんとお金も儲けてもらわないと。それに、まだ若い美和さんに、過剰に、不必要に高い建物を建てさせたくはなかった。それもあって、あれもこれも…という気持ちを抑えるようにはしていたと思う。」。



↑“「洗顔用ネット」を縫っている”店長。

美和さん＝施主の想いを、村上さんと久保さんという設計者が、形にする。これが、まず第一の、建築のおもしろさ、幸せだと思うのだ。でも、この段階では、まだ「目に見えるモノ」にはなっていない。図面やイラストはあるものの、“アンビルド”な状態なのだ。

そして、いよいよこれを目に見えるもの…つまり、触れ、その空間に立ち、利用し、お客さまを迎えるための舞台づくりが始まる。これが「施工」の作業、つまり私たちの出番である。

今、まさに建設中のこの「若松屋化粧品部」。美和さんならではのしなやかさで、現場へ積極的に参加し、職人たちとコミュニケーションをとり、目の前で自分の夢の器ができていくさまを見守っている。

↑店舗面積は小さいものの、資生堂の限定商品ももれなくここで手に入る。

次回の【物語のある建築】では、その“ちょっと違う”お店の内部と、この美和さんと現場のやりとりを通じて、建設業の幸せをおすそわけします。

（次号に続く）

↓店内には手書きのポップがたくさん。

↑デパートなどで大人気のロジェの小物。扱っているのは四国で2店舗、香川では若松屋のみ。

【重陽の節句／菊香る長寿の祈願】

旧暦9月9日は「重陽の節句」です。「菊の節句」、「重九の節句」とも呼ばれます。あまり聞いたことがないなと思われるかもしれませんが、これまでにご紹介した『上巳の節句』（3月3日）、『端午の節句』、（5月5日）、『七夕の節句』（7月7日）と同様に五節句のひとつです。

◆菊の節句◆

重陽の節句も他の節句と同様、中国から日本に伝わりました。

古来より中国では陰陽思想（世の中のあらゆるものは陰と陽という相反する要素で構成されているという考え。奇数は陽、偶数は陰）が用いられ、陽数が縁起の良いものとされてきました。その中で「9」は、一桁の陽数のうち最も大きな数＝「陽数の極」であり、その「9」がふたつ重なる9月9日は、非常にめでたい日「重陽の節句」として祝う風習がありました。

この日中国では、丘や山など高いところに登り、秋の野山を遠望しながら酒を酌み交わしました。赤い茱萸（しゅゆ）の実を身につけ、菊の香りを移した菊酒を飲み、長寿とともにこれからの寒い時期に備えて、無病息災を願ったのです。またこの日は、寒暖の境目でもあり、酒はこの日から温めて飲むものとされていたそうです。

重陽の節句には、その時期最盛期を迎える菊の花が、その香りと花の気品の高さによって邪気を祓い、長寿をもたらすとされ、多く使われました。これが「菊の節句」と呼ばれる由縁です。

日本には天武天皇の頃に伝わったとされ、年中行事として盛んに行われるようになりました。この日に菊を用いる風習も早くより宮中行事に取り入れられ、「菊合わせ」という菊を愛でる宴がその初めとされています。

その後江戸時代には、幕府により式日（現在の祝日のようなもので現在の五節句へと繋がる日のこと）のひとつとして定められ庶民の間にも広がっていきます。

重陽は秋の収穫の時期と重なり、農山村や庶民の間では「栗の節句」ともいわれ、収穫を祝う祭もかねて行われていたようです。明治時代までは庶民の間で盛んに行事が行われていましたが、徐々に私たちの日常生活とは縁遠くなっていきました。その理由には、新暦が使われるようになったことによる時期のずれが関係していると考えられます。旧暦と新暦とでは1ヶ月ほどずれがある為、「菊がまだ咲いていない」、「作物の収穫にはちょっと早い」というようなことがあったため、重陽の節句を祝う風習が薄れていったのではないかといわれています。

◆菊の被綿（きせわた）◆

天武天皇の「菊合わせ」から始まり、平安時代の貴族たちは、菊を観賞したり、菊酒を飲んだりして、その香りを楽しみながら長寿を願いました。

被綿もそのひとつです。これは、重陽の節句の前日となる8日の夜に、菊の花に綿を被せて夜露や香りを移しとり、翌朝その綿で体を拭いて健康や長寿を願ったというものです。白い菊には黄色の真綿を、黄色の菊には赤色の真綿を、赤い菊には白色の真綿を着せて香りを移していたそうです。香りを楽しむのはもちろんですが、見た目にも彩り鮮やかで、「菊を楽しむ」ことにいろいろな趣向が凝らされていたようです。

◆菊にまつわる花札◆

花札というと博打のイメージが強い方もいらっしゃるかと思いますが、1月から12月までの季節の花を表した絵柄は、趣があるように感じます。その中で9月はやっぱり菊。「菊に盃」、「菊に青短」、「菊」の3種類です。

この菊と酒盃が描かれた花札は菊酒を表現したもので、「桜に幔幕」（左上）の札とで「花見酒」、「月」（左下）の札とで「月見酒」と呼ばれる日本の行事にまつわる役を作る札になります。こうして花札をみてみると、違う楽しみ方ができて、面白いかもしれませんね。（文・土岐倫子）

－ 菊の節句 菊の楽しみ方 －

☆菊枕☆
乾かした菊花か、生花を袋に包んで枕もとに。頭や目の熱を冷ましてくれ、ぐっすりと眠れます。

☆菊花茶☆
白や黄の菊の花から作るお茶のことで、疲れ目や熱に効きます。さわやかな香りにリラックス効果も。

☆菊酒☆
菊の花をお酒に浮かべるだけでも風流ですが、菊のエキスを抽出した菊酒なら来年まで楽しめます。密封瓶に、花びらとその 10 倍の量のホワイトリカー、好きな量の砂糖を漬けこめば、ひと月くらいで飲みごろになります。

参考『なごみ歳時記』

中津万象園

「花の歳時記（16）秋陽に輝くモッコクの果実」

美術館の北側と西側には数本のモッコクが特有の整った樹形と気品のある雰囲気で茂っています。庭園樹としても高い評価を受けているこのモッコクが最も輝かしく見える時期は果実が熟する秋であります。光沢のある葉をバックに球形の赤い実がぶら下がり、太陽の光を浴びて宝石のように輝いています。（写真参照）

モッコクは本州の関東地方以西（主に太平洋側）、四国、九州、沖縄に、そして海外ではアジア東南部の熱帯地方に分布しています。

その材質が緻密で硬く、シロアリの食害を受けにくいので建築用材として重宝され、その昔「沖縄王朝時代」首里城正殿の建築材を確保するため、伐採禁止木とし庶民のモッコク材使用を禁止したそうです。

中国ではこの樹木が芳香を放つことからその名を「木香　モッコウ」としました。それが日本で訛って「モッコク」になったと言われています。（長岡　公）

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路　坂出北ICより約8.5km／約15分
坂出ICより約14km／約20分
高速道路善通寺ICより約5km 約10分

【長岡　公　氏】
昭和2年10月　香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和26年3月　鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和26年4月以降　香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・
笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、
高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和63年3月　定年退職　香川西高等学校教頭
現　在　公益財団法人中津万象園保勝会　理事
※主な著書に
「讃岐の名園紀行」（栗林 玉藻編／中・西讃編）がある。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色（16）「苔菊」

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういったものの結晶とも言える「重色目（かさねいろめ）」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしっらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

表：紅／裏：黄
着用時期は秋。
名称からは菊の苔に因んだ色目だと思われますが、配色からすれば紅菊をモチーフとしているのでしょう。

【編集後記】　今回の「物語のある建築」は、丸亀の老舗『若松屋』さん。強い想いを持つ美和さんですが、それを実現するために、たくさんの人が美和さんを支えようと集まっています。「どうしてそんな風に、多くの人が美和さんを助けたいと思うんだろう？」と考えてみれば、それは、ふたつの要素によるのだと思うのです。

一つは、「相手のことに興味を持ち、積極的に係わり、また自分に係わらせようとする姿勢」、そしてもう一つは「自分の想いを熱く語り、その実現に向け真剣に努力しているところを素直に見せる姿勢」です。

今、私の机の前には、【石を投げると波紋が起こる。】と書かれたカードが貼ってあります。お世話になっているかたにいただいた、『ポジティブカード』（福島正伸）の一枚です。

私は、夢を見るのも才能のうちだと思っています。どんな夢を見、その実現のためにどんなステップを刻もうとするのか。―美和さんは、お手本にしたい女性のひとりです。

**********御意見、御感想をお聞かせ下さい**********

建設業許可：香川県知事許可（特23）第189号／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第1997号
FUJI
富士建設株式会社
本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間300番地1
TEL0875-83-2588（0120-832589）
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail　y-manabe@fujikensetsu.jp　（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処　懐風亭